

六十惑

はじめに

(2009 年 5 月筆)

【孔子のメッセージ】

子曰く、「吾、十有五にして学に志す」。中国古代の思想家として名を成した孔子は、今から 2500 年以上前に魯の国に生まれた。幼くして父を亡くし困窮にあえぐ中で、彼が学問で身を立てようと決心をしたのが、15 歳のときだった。19 歳で結婚して一男一女をもうけたが、当時は穀物倉の出納係や魯侯の祭祀に使う家畜の飼育係といった下役に就いて生計を立てていたとか。そのせいもあってか、彼は特定の師をもたず、不明なことがあればそれを知る人を訪ね、一つ一つ教えを請う姿勢で臨んだそうだ（「エンカルタ総合大百科」参照）。

私の儒教に対する考えはさておき、素直に脱帽するしかないタフな精神力、実にけれどもの真摯な勉学の姿勢だ。その甲斐あって、孔子は、苦節十年余の間に学問の基礎をしっかりと築き、30 歳の頃には立派に独り立ちした（「三十にして立つ」）。そして、40 歳になると道理がわかって心の迷いがなくなり（「四十にして惑はず」）、50 の歳には天から授けられた自らの使命を悟った（「五十にして天命を知る」）そう。60 歳を迎えたときには、理にかなった主張なら聞けば完全に理解できるようになっていた（「六十にして耳順う」）という。

この孔子の言葉は、彼の弟子たちによってまとめられた「論語」の「為政」に出てくる。単に孔子がこう述べたと紹介しているのではなく、彼の思想を伝えて人々を唱導するメッセージの性格を帯びている。言い換えれば、誰もが「さて、あなたはどうか」と自問を迫られることになるわけだ。

【「四十不惑」から「六十多惑」へ】

稀代の大賢人と自分の来し方とを対比しようなどとは、ゆめ思わない。だいいち時代状況がまるで違うし、幸いにも私は苦学をせずにすむ家庭環境に育った。20代半ばに結婚したが、二児を抱えた大学院生時代でも経済的な窮迫とは無縁でいられた。また、博識で気概に溢れる良き師たちに恵まれもした。

ただ、「四十不惑」の部分だけなら、私もそうだったような気がしないでもない。大学教員としての研究・教育生活が軌道に乗り、何冊かの自著を刊行し海外留学も経験して迎えた40代は、今にして思えば、多忙な日常ながら、総じて心安らかな時期だった。わき目も振らず、体力に任せて疾走する爽快感を、それと自覚することもなく楽しんでいたのだろう。

そのまま何事もなく進めば、「学究こそ我が天命」と疑いもせずに50代を過ごし、ゆとりをもって他者の意見を聴きつつ研究・教育の果実をさらに大きく実らせる60代を迎えられたのかもしれない。私が学界で出会った同世代の人たちの大半は、定年に達して他大学に移った方も含めて、今も現職の教授として第一線に立ち、学術書を出したり、マスメディアで意見を述べたりされている。それを目にし耳にするにつけ、心ゆくまで天命に沿ってご健闘いただきたいと、エールを送る気分になる。

私自身は、50代半ばに家族の健康問題に直面し、以前のような仕事の仕方を続けられない状況に陥った。そして、年月の経過とともに、私事に相当な労力と時間を割かなければならない以上、どんなに工夫しても心身の疲れが累積し、研究・教育の任にいつまでも耐えられるものではない、と思い知るようになった。何とか定年（63歳）まで頑張って、以後は家庭内の役割に専念しよう。すでにその覚悟を固めていたが、ゴールまで残すところ10ヶ月になって胃がんが見つかった。手術に続く抗がん剤投与の副作用にふらつきながら定年を迎えたとき（2007年3月末）には、やはり学界から完全に身を退いて家事専従に回るのが自分の天命なのだと、改めて得心したものだ。

しかし——。すっぱり割り切って定年を迎えたのに、何ヶ月も経たない頃から心のざわめきを感じるようになった。リタイアした人間としての日常生活は、職場やプロ意識の拘束から解き放たれていて、豊かではないものの、それなりに居心地がよい。内輪の事情から一人で気ままに外を飛び回る自由は制限されているけれど、他方で家族との関わりは濃密だし、家事の分担も結構多くて、暇でも退屈でもない。かつて同業者だった人たちの活躍

ぶりに、まばゆさと頼もしさを感じこそすれ、羨望の念などさらさら起きない。それなのに、一度は天命と見定めたものが必ずしもそうでもなさそうに思えだし、次第に落ち着かない状態になってきた。

これまでにこのホームページの「ごあいさつ」を何度か書き換えている。いつの場合も、その時点における私の心境をストレートに記すようにした。いま読み返してみれば、自分でも驚くほど気分の揺れをくり返していて、「六十多惑」と評するしかない。しかも、現在なお「六十有五にして天命を知らず」なので、今後も多惑が続く公算が大きい。いやむしろ天命を悟らずに心惑う方が人間らしいのではと居直り、もっぱら自らを客観視する目的に向けて、私の心象風景の変遷を跡づけることにしよう。とりあえずは過去の「ごあいさつ」の中身を集約する形になるが、続きがどのようになり、いつの日にピリオドを打てるのかは、本人とて知る由もない。

I. ホームページの開設

(2007 年 7 月筆)

【退職直後：喧騒の 2 ヶ月】

街中が桜色に染まった 2007 年 3 月末、私は定年に達して京都大学経済研究所を離れ、無職の身となった。「ああ、これで楽になる」と思いきや、世の中はそんなに甘くはない。期待はものの見事に裏切られた。

そうでなくとも 3 人家族の全員が健康面で問題を抱えているのに、近くに住む幼い孫の入退院が何サイクルもくり返され、私たちもその手助けに当たらなければならなくなったのだった。受診や介助のために一日に複数の病院を訪れることや、同じ病院と家とを何往復もすることも珍しくなかった。おまけに、来客を受け入れられるようにしようと前もって計画していた自宅のリフォーム工事も重なった。もちろん、退職に伴う各種の手続きもあれば、身辺整理の必要もあった。教壇を去る私を待っていたのは、しっとりとした平穏ならぬ、以前に倍して慌しい喧騒の 2 ヶ月だった。

ふり返ってみれば、退職前の 10 年近くというもの、私は家庭内の介護やそれに伴う自身の鬱屈と体調不良とで身動きがとれず、外部社会との接触に乏しい閉鎖的な生活に終始した。その間、出版社のオファーもあって、幾度か書物の公刊の準備をし、数冊分にわたるディスカッション・ペーパーを書き溜めはしたものの、研究テーマと現実生活との距離感に意気を削がれ、結局、すべてお蔵入りにしてしまった。学会報告や講演も、ドタキャンで迷惑をかける恐れがあり、次第に引き受けられなくなった。学会運営からも身を退かざるをえない、学部ゼミさえやむなく閉鎖する、マスコミ関係者には会う気になれないといった始末で、辛うじて続けられたのは大学院ゼミだけだった。しかも、最終年度の夏には胃がんの手術を受け、その後も再発防止の抗がん剤治療の副作用（とくに低血圧と食欲不振）に絶え間なく悩まされることになってしまった。

そんな芳しからぬ状況にあった私にしてみれば、青息吐息ながら定年のテープを切れたことが大きな救いだった。もとより、以後の生活については自分と家族の健康回復に努めるという以外に具体的な構想など持ちようもなかった。いずれ何らかの形で社会的な情報交流や研究・教育に関われるようになればいいなあ、と漠然と感じていたにすぎない。そして、実際に定年を迎えや、一息つく間もなく前述したてんやわんやの渦に巻き込まれたという次第だった。

心配した孫の病気は、幸い大事に至らず完治した。前後して家のリフォームも完了し、6 月以降はやっと落ち着いた時間を持てるようになった。いわば 2 月遅れでやって来た平穏だったが、その順延期間は私にとっては案外、有意義な一面も持っていたのかもしれない。足繁く病院に通わなければならないし、家の中は長い工事で人の出入りが絶えず足の踏み場もない。普通なら退職の寂寥感や喪失感を最も強く感じたであろう時期だったのに、そんなウェットさに浸っている余裕は時間的にも、空間的にも、全然なかった。その意味で、私の精神衛生に対する「天の配剤」だったと思えなくもない。

【閉ざされた日常とホームページ作り】

積年の疲れが徐々に薄らぎだした 6 月下旬のある日、同志社大学の一室を借りて開かれた研究会に、私も顔を出させてもらった。退職まで京大でやっていた大学院ゼミのメンバーや OB が集って立ち上げた研究会の最初の集まりだった。30 年も前に書いた私の著書が当日の検討対象だったこともあり、せめて初回ぐらいはと「枯れ木も山の賑わい」のつも

りで出席した。久しぶりに研究会のアカデミックな空気に触れ、さらに懇親会で歓談をしている中で、自分が経済学の研究者・教育者をしていたことを思い出した。乾いていた細胞に水が染みてくるような清新な感覚を味わった。

研究会の翌日から4日間、新潟県の妙高高原に家族で滞在した。保養目的とはいえ遠方に出かけるのは気がかりだったが、無事に往復できたので全員の体力水準に一安心。私自身に関しては、1年余の抗がん剤の服用期間が終わりに近づいており、近い将来に副作用から解放され一段と調子が良くなることも期待できた。



妙高高原にて

こうした経過と見通しが、刺激と現実感を与えてくれたのだろう。私の心中で、自由になる時間があれば現代社会経済に関する勉強を気ままに進めたい、そこで得る知見や折々の雑感を情報として発信して社会と少しでも交流したいという欲求が、頭をもたげだした。

確かに体調は上向きだ。とはいえ、まだ万全には程遠く、頻度の低いボランティアであっても責任のある仕事など引き受けられそうにない。家をあけにくく、先の予定も立てにくいという家庭の事情も、いぜんとして行動上の縛りになっている。そんな私であっても、情報化社会の恩恵に積極的に浴する算段をしさえすれば、閉ざされた日常をある程度変えられるかもしれない。そこで、いわば窮余の一策として思い立ったのがホームページの開設だった。

ウェブ・サイトの立ち上げと言っても、私はその種のことには完全な素人だし、手取り足取りのコーチを頼める人も、近くにはいない。どうせ不格好な代物にしかならないだろうが、技術的に習熟する中でおいおい改善すればよいと腹を決めて、市販ソフトのマニュアルを頼りに試行錯誤しながら、自力でこつこつ作業を進めた。午前4時半にヒグラシの声で目を覚まし、暇を見つけてはパソコンに向かう日を重ねて、1ヵ月後に曲がりなり

にもホームページの発足に漕ぎつけた。

言わずもがなながら、体裁よりもっと重要なのは中身の方だ。コンテンツ作りにつながる自らの研鑽のために、興に乗れば寝静まった深夜にも自室の灯りを燈して、読み書きしたり、考えにふけることになるだろう。その灯が現代社会経済の一隅を照らす光になってくれればと願って、何とか形にしたホームページを「書斎の灯」と名づけた。

Ⅱ．「趣味の学習」を超えて

(2008 年 1 月筆)

【サブプライム問題と「趣味の学習」】

定年退職から 4 ヶ月近く経った頃にホームページを開設した私は、無理のないゆっくりしたペースでコンテンツ作りを進めた。「折々の独り言」と題した項目を中心に据えて、ささやかな実体験に根ざす経済寸評になってくれればと願いつつ、心の赴くままにエッセイもどきの文章を幾つか書き綴った。網戸ごしの真夏の夜風、秋の夜寒、厳冬の真夜中の冷気をしみじみ感じながら、「書斎の灯」のもとで。

それと並行して、私に関心を抱いている経済事象とりわけサブプライム問題についての勉強も、かなり熱心に積み重ねた。こちらの方は後にコンテンツとして扱おうという考えに基づくものではなく、ただただ知らないままに放ってはおけない気分が駆られてのことだった。

実は私が定年になる直前からアメリカでサブプライム・ローンの焦げ付き問題が表面化しだしたのだが、なぜか尋常ではない肌寒い気配を感じて、いたく興味をそそられた。当時はまともに研究に従事できるような健康状態ではなかったけれど、関連するニュースに気を配り、退職後の暇つぶし用のつもりで論文・資料の収集にも着手していた。その流れで、実際に自由な時間ができ体調も上向いた 6 月からは、サブプライム問題の学習に取り組みだした。リフォームがすんだ拙宅を時おり訪ねてくれる大学院の教え子たちに、まだ自分も現状認識がほとんどできていないくせに、やがてこの問題が世界経済を揺るがす大凶事

に発展するだろうと予言したりもした。確たる根拠もない放言だったが、只事ならぬ匂いを嗅いでいたのは間違いなく、それを口にすることで自分の勉学意欲を奮い立たせた面もなしとしない。

勉強の開始から 2 ヶ月、2007 年 8 月にサブプライム問題の欧州金融市場への波及が表面化し、それを機に世界的な金融危機に向かって歯車が急回転しだした。同じ盛夏に抗がん剤から脱却して体調が一段と良くなった私は、サブプライム問題が世界的規模で深刻化する予感にせきたてられる思いで、ごく小さな研究会のメンバーに加えてもらった。「住宅ローンの証券化」や「投資銀行のビジネスモデル」が事のキーポイントをなしているのに、私にはそうした証券市場関連の知識がまるっきり欠落している。自らの足らざるを痛感し、同分野を専門とする研究者の指導を仰ぐためだった。

とはいえ、私の心づもりは、あくまでも「趣味の学習」でしかなかった。私的な事情による拘束時間が長い私の場合、退職したからといって「毎日が日曜日」の贅沢な境遇になれたわけではない。体がちょっと楽になったからと、うかつに研究の領分に入り込んだりすれば、大変だ。単に本やレクチャー、会話などを通じて人から学ぶだけなら気楽だけれど、「よく調べ考えて真理をきわめること」（広辞苑）を意味する研究となると、足を踏み入れたとたんにも身も心も忙しくなって、「毎日が週日」と化してしまうだろう。そうなれば自分にも家庭にも無理がかかり、下手をすれば元より悪い状況に陥りかねない。こんな心情から、自分に強く縛りをかけていた。

【宗旨替え】

「趣味の学習」どまりにしよう。そんな自制心は、長くは堅持できなかった。10 月中旬に家族旅行で北海道に行ったのが、ちょっとした宗旨替えの契機になった。その間のいきさつは――

大学院生時代（修士 1 年）に新婚旅行で訪れた函館の地に約 40 年ぶりに降り立つと、経済学研究者の道を意気揚々と歩き出そうとしていた当時の自分の姿が頭に浮かび、とても懐かしく感じた。その夜、テレビで識者がサブプライム問題に関して、「日本経済に対する悪影響は限定的だ」とコメントするのを耳にして、思わず「そんなはずはない」と口走ってしまった。

その分野については浅い勉強しかしていないけれど、私が得ている感触とはまるで違う、

高をくくっていると経済失政のつけを国民に回す結果になるだろうに、と腹立たしさを覚えたからだった。そして、私の認識の方がおかしいのかどうかを知るためにも、自分なりに実情を精査する必要があるし、そのように努めよう、と密かに決意した。多分、40年前の青雲の志が心の奥深くで作用し、少しは研究らしい作業に携わってもよいかなという思いを湧き上らせたのだろう。

といった経過で、サブプライム問題に関する趣味の勉強を研究へと深化させる意思を固め、ういういしい気分で研究会

報告を買って出るようになった。検討対象とした問題がどんどん重大化し続けたので、その推移を跡づけるだけでも話題提供にはなり、報告材料に困るようなことはなかった。そうした報告を幾度か重ね、薄っぺらながら少しは蓄積ができたのを受けて、年が変わった頃には、事の緊要性を意識してホームページ上に研究ノートを載せる方向で努力するのも悪くないな、と思い始めた。実態把握の作業を継続しつつ具体的に構想を煮詰め、研究の進行に合わせて連載する形にしようと決めたところで、退職1年目の幕が下りた。

宗旨替えと言っても、別に研究・教育職への復帰を目指そうとしたわけではないし、私にその要件が備わっていない実情も明瞭に認識していた。それでも学習から研究への移行は、私にとって簡単な話ではなかった。体調の改善が目覚しく、もはや我が身を半病人とは感じなくなったものの、病気前と大違いなものも紛れもない事実だ。間食なら手が止まらないほどなのに3度の食事は進まない、食後には強い膨満感・不快感に襲われて寝込むこともままある、しばしば消化器の通過障害を意識する、持久力が弱まる一方で疲れがなかなか抜けなくなった等々。むろん加齢の作用も混ざっているのだろうが、馬力の低下には厳しいものがある。

いざ研究をと張り切ってはみても、この身体状況のもとで、家庭における私の日常的な役割と折り合いをつけながら果たしてどの程度やれるものなのか、正直なところ、自分で



クラーク像の前で

もまったく見当がつかなかった。となると、道は試行錯誤のみ。研究会報告の積み上げと研究ノートの掲載準備は、オーバーワークであえなく失速し、今度は何とか自分を奮い立たせるといった過程を小刻みにくり返し、その中で私なりの「巡航速度」を体得する過程でもあった。

Ⅲ. 退職2年目の出来事

(2009年2月筆)

【連載の開始と中断の事情】

試行錯誤の成果なのか、退職2年目（2008年度）に入った頃には、私にとっての巡航速度がわかり、どうやら少しは研究の実をあげられそうだと自信も持てるようになった。そこで同年5月、懸案の研究ノート発表を実行に移すことにした。満を持しての連載講座「世界を覆うサブプライム問題の脅威」の開始だった。

ところが、第2講を7月上旬に掲載したところで企画はあえなく中断。以後ずっとそのままになってしまった。連載を楽しみにしてくれた人や健康を害したのかとご心配いただいた方もあり、ひどく無責任な所業だと批判されても返す言葉がない。実は7月から10月にかけて、私には過酷な労働の日が続いた。立ち入った説明は控えるが、新設の可能性が出てきた通信制大学院用の授業の準備にしゃかりきにならざるをえなかったのだった。そちらを優先させざるを得なかったので、手がけたばかりの連載は気になりながらも棚上げの扱いとなった。

私自身は研究を再開したけれど、学習の垣根を越えて研究の領域に踏み込むというのはあくまでも心理のレベルにおける移行であって、それを求職と結びつけて考えていたのではない。再びプロの研究者として活動するのは環境条件からして容易ではないし、ましてや教育者として壇上に立ち長時間の講義を週何コマもこなすことなど、体力的も望むべくもない。しかし、そんな制約があっても通信制なら融通が利くので大丈夫だと関係者から誘われて、以前に教員予定スタッフに名前を加えてもらっていた。その件の関係で、簡単

なシラバスと授業スケジュールに加えて、各回の授業内容を詳しく順序だてて記すように求められたのだが、完成した講義ノートの提出を指示されたも同然と感じた。担当科目もオムニバス形式のものを含めて3つとされたので、こなすべき仕事量の膨大さに息を呑む思いだった。

それでも、当該3領域（知的財産権、国際経済、公共政策）に関してはベースとして使用できる自著もあるので何とかなるだろうと、心のどこかで高をくくっていた。あにはからんや、そうは問屋が卸さなかった。いったん研究・教育の現場を離れた身が、自分の過去の著作にざっと目を通すだけで以前の知的水準と感性に立ち戻れるなんて思うのは厚かましい幻想だと、すぐに悟った。待っていたのは、身辺整理によって散逸してしまった資料類を再収集しながら、自分がかつて歩んだ道程をこつこつとたどり直し、得心したり首をかしげて調べたりしつつ改めて情景を頭に刻み込むという、地道で時間のかかる作業だった。

しかも、補充や追加を必要とする箇所が、次から次に出てきた。以前に私なりの考察を試みた事象のうち、今日でもなお重要性を失っていないものに関しては、当然ながら時系列的に分析を延伸しなければならなかった。のみならず、近年になって新たに浮上したり重大化した問題も多く、それらについては一から勉強して文章化する必要に迫られることになった。

かくして、猛暑の候なのに寸暇を惜しんで机に向かう、まるで受験の追い込み期のごとき悪戦苦闘の日々とあいなった。それは私が直前に体得した「巡航速度」を大幅に上回っており、その証拠に4、5日もすると両方の肩と腕が痛み出した。毎晩、寝ていると関節がはずれたかのような激痛がして幾度もとび起きたし、昼間も腕の動きがままならず、パソコンを打つのさえ大儀でたまらないという始末。病院で両肩に痛み止めの注射をしてもらっても効き目はなく、腰や足にまで広がった痛みと鎮痛剤の服用による倦怠感にさいなまれながら何とか仕事を片付けきった時には、夏はとっくに終わって10月も後10日を残すだけとなっていた。

【授業準備のリハビリ効果】

その1週間後。体のあちこちの痛みが少し薄れ、延び延びになっていた家族旅行の手配もすんだ時に、大学院創設自体が頓挫したとのニュースに接した。かねて耳にしていた情

報と正反対の事態だけに、さながら豆鉄砲を食らった鳩だった。もっとも、驚きはしたもの、がっくり気落ちしたわけではない。いや、私個人としては、ハードワークの体調への悪影響を体験し次年度からの授業負担に不安を抱いていたので、むしろほっとした気分になった。

11月初旬の家族旅行は、あらかじめ肉体的な疲労がとれており、精神的にも重荷から解放されていたので、悠々と楽しめた。予定地は城崎温泉だけだったのに、宿で1日のうちに鳥取砂丘まで行って戻れると聞いて、食指がぴくぴく。急遽、宿泊数を増やして鳥取にも足を延ばした。

らくだの背に揺られる長女をビデオに撮る。風紋を踏みしめて起伏に富む砂丘をさまよう。砂山の頂上に腰をおろし潮風に吹かれな



鳥取砂丘にて

がら日本海の荒波を眺める…。雄大な光景とゆったりした時の流れには、邪気をはらう力があるだろうか。気付けば、いたずらに焦らず、一喜一憂せず、「身の丈」に合わせた生活を送ろうと素直に心に決めた自分が、そこにいた。

と同時に、こんな考えも頭を駆けめぐった。—今の自分の「身の丈」は、さほど短くはないのかもしれない。授業準備の難行苦行が強制的なりハビリとなって体力・気力の天井を引き上げてくれたおかげで、研究・教育面での巡航速度も苦行前より相当アップしたような気がする。この自己評価が妥当なのかどうか、近いうちに実践を通じて確かめてみるとうしよう。

【「巡航速度」が上った気分】

旅行から帰ると、さっそく頼まれていた書評の仕事に着手し、ひと月ほどで原稿を仕上

げた。刷り上りで雑誌の見開き2ページ分では、大雑把な内容紹介だけでスペースの過半が食われてしまい、広がりや深みのあるコメントを書くだけの余裕などありはしない。それを承知の上で、書評対象の専門書が扱っている主題（米国ブッシュ政権の経済政策）についての自分自身の理解を深め、客観的に納得されるだけの意見を練り上げる見地から、同書をくまなく丁寧に読み込んでみた。関連する他の文献・資料にもできるだけ目配りして、知識の吸収と分析視角の点検に努めた。手前味噌ながら、研究者としての充電がちょっとだけ進んだ感触を得た。

書評の執筆を済ませた数日後には、京都市内の公共施設を会場とする研究会に出向いた。自然科学を含む多様な専門分野の研究者が大学の枠を超えて集まっている研究会で、何年も前から定期的開催されている。当日は米国航空宇宙産業に造詣の深い関東在住の研究者の報告が予定されていて、主催者から興味があれば参加しないかとお誘いをいただいたのだった。内輪の小さな研究会にしか出ていない私は、これも研究者らしくあるための必須のステップだと位置づけて、久しぶりに入り江から外洋に漕ぎ出そうと意を決した。実際、アカデミックな話に耳を傾け、質疑や研究会後の懇談に自分も加わる中で、研究者魂を深く刺激される結果になったと言える。

世は「百年に一度の経済危機」ながら、わが家的にはまれにみる穏やかな年末・年始を経た今年（2009年）の1月上旬、別な研究会の幹事から研究報告の依頼を受けた。そろそろ壇上に立つ訓練もしてみるかと講師役を受諾した。サブプライム問題の連載中断が気になっていたのも、それを演題に選んだ。直ちに、2週間後の会合に間に合わせるべく猛ダッシュ。読み上げ用の原稿「サブプライム問題に端を発する世界経済危機」が完成したのは、発表日の前日だった。

わざわざ全体を文章化したのは、報告の最中に疲労に襲われて頭の働きが鈍くなり、話の脈絡が混乱してはいけない、と自戒したからだ。2年前の退官記念講演でも、30分と立ってられない体調不良に対する苦し紛れの対処策として、口語調で記した原稿を用意した。話し始めるとすぐに低血圧でふらつき椅子に座りこんだこと、やがて頭に霧が立ち込めた状態になり、遠くに自分の声を聞くように感じながら原稿をひたすら読み進めたこと——今となっては懐かしい思い出だが、私の心中にトラウマとなって根を張っているようでもある。幸い、もはや当時のように体力的に脆弱ではない。ただ、その後もずっと、人前で少し長く話すとエネルギー切れになってしまうのが通例で、私の場合にはそれが研究・教育関連の業務中で最も身に応えるもの、いちばんのネックだと思ってきた。だから、今

回も念のために原稿を作成し、それを護符として携えて鬼門をくぐろうと決めたのだった。

聴衆には研究者だけでなく新聞の催し物欄をみて参加された人もいたので、あまり学術的になりすぎず、かつ適宜、用語や概念の説明をさしはさむように心がけて、原稿の文面にはとらわれない形で報告をスタートさせた。案の定、半時間も経つと疲れで息苦しさを覚えだしたものの、意識は遠のかず。機械的に原稿を音読する状態には陥らずに1時間以上も話し続けられたし、さらに1時間ほどの質疑応答にも耐えられたのだから、文句を言えた義理ではない。報告の出来栄はいざ知らず、壇上で話すことの試運転としては旨くいった方だろう。

さすがに2週間も缶詰めでおこなった準備作業と研究会当日の長丁場が響いて、続く数日間はグロッキー気味だった。だけど、それだけで回復したのだから、自分としては巡航速度の上昇を確認できた気持ちになった。

IV. 3年目も平穩ならず

(2009年11月筆)

【心地良いスローライフ】

退職2年目(2008年度)の最後の月に、2人目の孫が生まれた。次女の第二子で男の子。私たち夫婦にとっては、子供は2人とも女性、初孫も女兒だったので、男の赤ん坊の泣き声や仕草が珍しく感じられ、私もいそいそとビデオを回す場面が多かった。

次女母子が実家に身を寄せていた1ヵ月は、わが家もどたばたの大騒動だった。かくて、心楽しくも孫たちの世話に大汗をかく喧騒のうちに、わが定年後ライフは3年目に入りたり。

再び家族3人きりの生活に戻るや、リフレッシュのためだとうたって、妻と連れ立ち京都市内のあちこちに出かけるようになった。今日は東福寺の青もみじを見に行こう、円山公園・將軍塚・清水寺のルートを歩いてみようか、そろそろ松尾大社の山吹も見頃だろう、せっかくの京都御所一般公開だから、…。幸い行き先には事欠かない。長女を誘って鴨川

や植物園を散歩することも、しばしばだった。

3人とも近年になく体調が良く、余暇も適当にある。いいですねえ、こんな生活は。「定額給付金」に代えて「高額寄付金」でもいただければ、一段と優雅な日々になること請け合いですな、なんて贅沢を言いながら、散歩三昧に大いにご機嫌だった。

ご機嫌でいられたもう一つの理由に、研究面でも私なりに納得したやり方で進んでいけそうな手応えを感じだしていたということがある。昨秋いったん立ち消えになった授業担当の話が再燃しだしてはいたが、仮に実現しても当初予定より1、2年遅れになるので、開講までに心身とも応分の役目を果たせる状態にもっていける自信があった。ただ、その件がどういう展開になるのであれ、昨秋の出来事を経て達した「身の丈に合った生活を」の境地にどっしり腰をすえて、焦らずに己の心に忠実なあり方で研究・教育と向き合おうと思っていた。

自分の体力水準や家庭事情による時間的・空間的な制約をわきまえた、無理のないペースでの気ままな研究。それと日替わりメニューの散歩。こうすれば立派なスローライフだ。ひどく質素でちまちましてはいても、私にとっては御の字の状況であり、とても心地良かった。

なお、研究に関しては、さしあたり当サイト上での公表を想定して、それまでにある程度進めていたサブプライム問題と世界経済危機に関する分析を深めるつもりでいた。ちょっと補足すると、定年後いったん学問の世界を離れた折に、私が生活者としての実感を通じて気づいたことがある。過去の自分は、知らず知らずのうちに悪しきアカデミズム特有の論理や思考パターンにとらわれ、それ以外に意識が届きにくくなっていた（詳細は「随想：鴨川の河畔にありて」）。その反省の上に立って、研究の再開にあたっては、これからは偏狭な専門家意識にもとづく課題設定や為にする議論はできるだけ避けて、庶民目線でテーマを決め、中心めがけて直球を投じるようにしなければ、と自分に強く言い聞かせていた。サブプライム関連の研究は、もともとそんな姿勢で取り組みだしていたものだった。

もとより私の実情からして粗略な考察にとどまる可能性が大きかった。しかし、たとえそうであっても、誰かが私の荒削りな提起を受け止めてより深い研究につなげてくれるなら、あるいは誰かの学習意欲の刺激に役立つようなら、これも研究・教育活動の一つのあり方なのではないか。その意味では「折々の独り言」などに載せる経済絡みの雑文だって共通点がなきにしもあらずだから、そちらも疎かにしちゃいけないな。そんなふうに思う

ようになっていた。

【飛行機手形に喝】

まったく気負わずに、サブプライム問題に関する研究を着実に進め、成果を当サイトに順次載せていく予定である旨を、「ごあいさつ」（2009 年 5 月下旬）の文中に記した。それなのに、直後に雑文 1 篇を追加しただけで、後は長い沈黙に。かの予定表明は、はずかしながら「飛行機手形」（なかなか着陸しない、あるいはたまに落ちる約束手形）と化してしまった。

実は、6 月の初めに身内に予期せぬ健康問題が生じた関係で、私たち家族が 3km ほど離れた所に住む孫たちの育児に協力を求められる場面が、ぐっと増えることになった。わが家に寝泊まりする日の多い 4 歳児を居住地近くの保育所までバスやタクシーで送り迎えしたり、休日には遊園地や公園などあちこちに連れて行ったり、風呂に入れたり、あれこれの遊びの相手をしたり…。また、3 月に生まれた乳児をあやしたり、ミルクを飲ませたり…。

私が一部を担った役目のどれにも、間違いなく楽しみの要素が含まれていた。それも中毒になるほどの高い濃度で。だから、決していやいや動いたわけではなかった。しかし、半ば喜びの請負仕事であっても、度を超せば疲れるのが世の道理。加えて、部屋の片付け、食器洗い、買い物などの家事分担量もはね上がった。

いかんせん基礎体力に乏しい身だし、ましてやただでさえ気だるい向暑の候のこと、疲労困憊して夜は異例の早い時刻に倒れるように寝入る日々となった。それでもなお疲れが残って蓄積したせいか、数週のうちに手の指、腕、肩、背中、腰、足など体の方々が痛み出し、以来、余暇は昼間でもおおむね痛みに耐えながら横になって過ごすという体たらく。オーバーワークの常態化は文字通り骨身にこたえた。

私が閉塞した生活を送るかたわらで、日本の政治は自民党から民主党への政権交代に向かって音を立てて流れていた。その方向性と世界的な背景を理解するために、せめて新聞・経済誌の記事に目配りするほかに読書くらいはしなければと、元気が残っている時には、短時間でも現代政治経済に関する書物を読むように努めた。

執筆作業については、手の指や腕、肩、腰の痛み具合からしてとても無理だと、すぐ悟った。面白いもので、何かを書こうという目的意識がないと、本の読み方も違ってくら

しい。自身の著述を予定して読むときには、つい材料探しのつまみ食いの読書になったり、あら捜しの視線になったりしがちなのに、今は書き手の導くままに素直に道程をたどりながら頷いたり首を横に振ったりできる——まだ「職業病」にかかっていなかった頃にはこんな醍醐味を味わっていたのかな、と昔の自分に懐かしさを覚えた。

ともあれ、手形を落とせなかったのには、不可抗力の面があった。ただし、内輪の事情が少しましになり体の痛みも軽くなった秋口以降は、むしろ惰性のなせる業だと認めざるをえない。鴨川の河畔で1、2時間、経済書を読む日を、できるだけ多くつくろうと心がけはした。だが、政権交代と鳩山新政権の派手な動きをめぐって、私なりに自らの研究歴に照らして感ずるところが多々あるにもかかわらず、意見の発信は念頭になく、傍観者を決め込んでいた。いかにインパクトは小さくとも、やろうとすればやれたのに、だ。

天の配剤か、そんな私の怠けぶりに「喝」が入った。

【旧友たちの「第二の人生」に触発されて】

親類の結婚式があって10月上旬に上京した機会に、大学時代に親しくしていた同級生4名と酒を酌み交わした。後に親戚関係になったNさんが場をセッティングしてくれたのだが、ほかの3人とはめったに会う機会がなかった。うち1人とは、京大経済学部の卒業以来初めての、実に44年半ぶりの再会だった。

どなたも著名な大企業・銀行に就職して重要な地位に就き、世界を股にかけて活躍した人で、今はそれぞれ「第二の人生」入りしている。その暮らしぶりを伺うと、Nさんは、某ベンチャー企業の監査役に迎えられて株式公開の準備作業に当たる一方、夫婦で世界の各地や国内を精力的に旅して回ったり、さまざまな人付き合いにいそしんだり、毎日の忙しさを楽しんでいる由。

Kさんは、家庭菜園に熱中して、各種の野菜づくりに精を出し、収穫物を奥さんの手を介してご近所に配っているそう。電卓を鎌に持ち替えて、澁刺とした半ばプロフェッショナルの農業者の風情。毎年のように娘さんたちが住む国々を訪ねるとも聞いた。

Sさんの場合は、裁判所の調停委員に選ばれて私人間の紛争解決に関っていると。非常勤なので時間のゆとりを活かして楽器の練習をしたり、演奏会を聴きにいたり、と昔から思い入れの深かった音楽への傾斜と造詣をますます深めている様子だった。

Oさんの日常生活にも音楽が息づいていて、熱心な楽器の弾き手、オーケストラの聴き

手であるだけでなく、関連論文の書き手としても活躍中。印刷物の形でもらった「フルトヴェングラー南米訪問の『謎』」と題する長文の論稿は、国際政治と文化の関わりにメスを入れた、立派な社会科学的考察だった。同氏は、在日ブラジル人を支援する NPO の主催者でもある。

おのおの制約条件があるだろうに、どの人も自らの生き甲斐とする道を見出して、伸びやかに歩を刻んでいる。しかも、言葉のはしばしから、世のあり方に対して学生時代の清新な正義心を保たれていることもわかった。翻って自分自身をみれば、自由気ままに国内外を飛び回ったり趣味に打ち込むといった生活は望めなくても、幸い研究という確実にやり甲斐に通じている道が常に傍らに控えている。それなのに、怠惰に身をゆだねてベストを尽くさず、社会正義の実現に微力を尽くす研究者としての責務も果たしていない。「これじゃ駄目だ、喝！」と、いたく反省した次第。

以来強く思うようになったのですね、まだ飛び続けている飛行機手形を遠からず無事に着地させなくちゃ、と。読書に際しては、以前の「職業病」的な読み方の弊害を自戒しつつも、私自身の来るべき執筆を意識して、漫然と目を通すだけに終わらない工夫しようという気持ちになった。機会があれば金融論関係の研究会で意見交換もしたい。執筆面では、**とりあえず経済風味のエッセイでも書くつもりで、頭に浮かぶテーマに関するメモをとり貯めよう。**——ああ、「喝」の靈驗あらたかなり！

V. 2010 年：楽観、暗転、そして…

(2010 年 12 月上旬)

【研究の醍醐味への思い】

私の 2010 年丸は、海路の日和に恵まれた小舟のように、波静かな港を漕ぎ出した。2 年続きの平穏な船出だった。それ以前の 10 数年は、歳末から正月明けまでが家族の健康問題で例外なく荒れ模様になる期間だったので、世間並みに近い迎春とくればまるで天国みたいだ。

しかし、天国から地獄に突き落とされるとまではいなくても、天国で閻魔に出会って一睨みされる程度のことは、まあある、というもの。前年の場合には、3月の孫2人目誕生に伴うドタバタは喜ばしい例外とみなすにしても、夏場が相当きびしかった(IV参照)。もう去年みたいに時化に翻弄されるのはごめんだ、今年こそ1年を通して穏やかな航海であってほしい、と年頭にしおらしく神頼みした。

私の勉強ぶりとは言う、前の年の秋に「喝」が入ってから、自分でも合格点をだせるような勤勉さになっていた。一つには、せつかく政権交代が陽の目を見たのに、鳩山政権の舵取りに不信を抱かざるをえない問題点(予算組み替えの先送り、事業仕分けによるムダ削減額の小ささ、首相の偽装献金疑惑と小沢幹事長の裏金疑惑、米軍普天間基地の移設をめぐる迷走、等)が次々に露呈し始めた現実に向け、事のいきさつを自分なりに理解しようと努めた。その思いの吐露を含む2、3の文章を「折々の独り言」欄に載せもした。

と同時に、よりアカデミックな研究に道筋をつけることも目指した。すでにある程度の蓄積ができていたサブプライム・世界金融危機関連の考察をおし進める課題を第一義と考えていたが、加えて、別の新たなテーマに関する資料の収集や文献の読破にも着手した。ちなみに、私が過去におこなった知的財産権に関する研究は、知財権のうちの特許権に集中的に光を投じたもので、著作権にはほとんど立ち入っていない。それが私にはずっと気になっていた。

空白を埋めるチャンス到来と勇んで著作権関係の専門書を読みあさるうちに、デジタル時代の著作権に対する興味が、うつぽつと湧き起こった。そして、それを通路にして私がかいま見たのが電子書籍の問題領域だった。一步そこに踏み入ると、眼前に探検心をそそる未知の世界がみるみる広がった。

知りたい対象がおいでおいでをして誘ってくれる。これぞ研究の醍醐味であって、ひとたびその味を思い出すや、日毎に没入の度が強まっても不思議はなし。2010年は、春のiPad国内発売が広く関心を集め、日本における「電子書籍元年」と騒がれることになる年だが、私の研究にとっても年明けとともに発進した電子書籍元年だった。

もっとも、机に向かえる時間が限られていた以上、研究にのめりこめば他の部分にしわ寄せがいくのは当たり前。すぐに掲載できる研究成果がまとまればよかったけれど、そうは問屋が卸さず。でもって、経済風味のエッセイの執筆にも急ブレーキがかかり、2月からは当サイトの更新はそっちのけになってしまった。

【病魔来たりて】

定年後 4 年目（2010 年度）がスタートした頃には、本格的な研究に進むための足場が細々ながら組みあがっていて、自分でも先行きが楽しみだと感じていた。

時折の来客と明るいうちからワインを飲み交わし、酔うほどに、久々のアフター・ゼミ気分にも口も軽くなる。「周辺事情が良くなってきたおかげで、10 数年ぶりに戦闘意欲が高まっている」、「もう少し蓄積を増やせば、研究者らしいアカデミックな議論もできるようになるだろう」などと、吹聴したりして。「この調子なら来春あたり研究・教育の現場に部分的に復帰できるのでは」とも。別に恰好をつけて強がったわけじゃなく、本気でそう語ったのだった。

ところが——。「好事魔多し」とはよく言ったものだ。あれほど晴れわたっていた空なのに 5 月には早くも一角に暗雲が生じ、6 月には全天が雲に覆われて雨が落ち始め、7 月に入ると本降りになり、8 月は未曾有の暴風雨状態、そしてそれが長く続いて…。

詳しく記す気にもなれないが、当方の門を叩いた「魔」は例によって病魔だった。心因性の歩行困難、足首靭帯断裂、アレルギー性紫斑病…、いやですね、どれも。ともかく、そんな招かれざる客が娘たちや孫娘を時間差で訪れ、それぞれ無遠慮に長逗留。おかげで私たち夫婦の「身内の急場を支える戦力」としての責務は、どんどん膨らんだ。でもって、私も妻と分担して、日常的な家事をこなしつつ、自宅で介護にあたったり、病院に面会に通ったり、孫たちを保育園まで送り迎えしたり、あるいは終日孫の遊び相手をしたり、と否応なくヘルパー専業のごとき生活を送るようになった次第。

定年後の悠々自適なんて、いつでもどこでも自由気ままに飛び回れるだけの条件を欠く私には縁遠いものだ、と最初からわかっていた。けれど、ひっそり家で研究に携わるささやかな楽しみを知り、その時間を徐々に増やせそうだと喜んでいたところだった。それなのに、ものの見事に当てが外れた。六十代後半にして、かつて経験しなかったほどの激しい家庭内労働に従事する羽目になろうとは。

基礎体力が手術前よりずっと目減りしてしまった私には、それだけで手一杯、と言うより明らかにキャパシティを超えていた。入梅の頃には、早くも疲労がたまって体のあちこちが痛みだし、吐き気もしばしば催して、真っ昼間なのに家の中で何度も寝転がることが当たり前になった。外出中に道端やショッピング・センターの通路にしゃがみ込んで休息

をとり、幾度か「大丈夫ですか」と人から声をかけられたりもした。この有り様では、時間が空いても机に向かうのは体力的にほとんど不可能で、勉学の意欲は萎えていなくてもぐったりして時を過ごすしかなかった。

思えば、前年の夏にも類似の事態が起きていたが、災厄の強度も継続期間も、今回の方が前回をはるかに上回った。梅雨時よりも盛夏、盛夏よりもさらに苛烈な残暑の秋、といった異例の季節の推移と歩調を合わせるかのように、身近な周辺事情が段階的に困難の度を増すところで、私はその枠組みにますます強く縛られて、右往左往するばかり。この現実、研究・教育の現場への部分的復帰という見込みの甘さを、私にはっきり教えてくれた。家庭の事情のために定常的な業務をこなせなくなるリスクがこれほど高くは、大幅に融通がきく職場に席をもらう場合ですら、求められる研究・教育活動をきちんと遂行するのは無理だろう。いや、ボランティアとして協力するケースであっても、果たすべき役割をまっとうできそうにない。これがクールな自己認識ってものだろう、そんな思いが次第に強まった。

他方で、8月に入って新たな事態が起き、その原因は何だろうと首をひねっている際に、ひょっとしたら我が家への魔の来訪には私の姿勢が関係しているのでは、と思い当たった。私が研究に集中すれば、家庭内にピリピリした緊張感がみなぎり、それに感応する家族の精神的安定に悪影響が及ぶ、といった関連性に意識が向かったのだった。改めて過去を振り返ってみると、なるほどそうだったんだな、と感じる場面が随所にある。だとすれば、問題は自分に跳ね返ってくるわけで、私の側でわがまを自制しなきゃいけないなという反省もせずにはいられなかった。

【書く欲求が湧く】

記録的な猛暑によるダメージも重なって身はくたくた、気持ちの面でもかつての高揚感はいささか、自責の念すら禁じえない。そんな冴えない状態で秋を迎えたが、幸い10月には潮目が変わり、病魔の撤収が進みだした。まず、次女一家に対する協力の必要性が妥当な水準へと低下した。続いて、長女の体調も改善傾向をたどり、11月半ばには家族3人そろって各々の運動療法を兼ねた散歩に出かけられるまでになった。

時あたかも紅葉の最盛期。ある日には、赤い絵の具を流したような真如堂の境内を通り抜けて、黒谷さん（金戒光明寺）まで歩いた。人混みを縫うようにして、「隠れたもみじ

の名所」だった一昔前を懐かしみつつ。その2日後には、京都府立植物園まで出かけて、お目当てのフウの大木の下に立ち、幻想的な木洩れ日を仰ぎ見た。次の日には、御所（京都御苑）の一角を、白い玉砂利とその上に降り敷いた銀杏の黄色い絨毯とのコントラストに感心しながら、ゆっくり散策した。東福寺や岩倉実相院などにも足を運び、丸々2週間を紅葉漬けで過ごした。

「今年は気象条件からして紅葉の当たり年になる」と専門家が予想していたとおり、確かに何年かぶりの鮮やかな錦秋だった。原理はうろ覚えでしかないものの、紅葉の美しさには、夏場の暑さや多雨も深く関わっているはずだ。あの記録的な酷暑と各地でのゲリラ豪雨騒ぎにも、少しは取り柄があったのだな、と変に納得する。

とまれ、近年になく色美しい紅葉が例年にも増して心身に染み入ったのだろうか、私は日を追って癒されていく自分を感じた。そして、ようやく私に何かしら自発的に考えて文にする気力が戻ってきたところで、手始めに「ごあいさつ」を書き換えた。もう師走が明日に迫った夜だった。

先に述べたように、私は8月のある時点から、自分の研究への没入が家族に及ぼす悪影響に留意するようになっていた。ただし、そうは言っても、私には研究を放棄するつもりなど毛頭なかった。

世界金融危機の打撃から脱却できない国々が通貨安競争に向かいだしているのが、とても気にかかる。電子書籍元年の実情もくわしく知りたい。昨秋発足した鳩山政権がわずか8ヶ月半で倒れ、後を継いだ菅内閣もともに機能できないでいるのは何故か、それに関しても自分なりの分析を試みなければ。こんなに探究心をそそる事象に囲まれていては、「はい、研究とはお別れです」なんてわけにはいくものか。要はやり方なんだ、また研究にいそしめる環境になったら具体策を練ろう。——漠然とではあったが、私はそんなふう考えていた。それに、時間ができ次第なすべき仕事もあったので、そちらをしっかりと済ませるのが先決問題だった。

これまた先述のとおり、10月になると周辺状況の悪化がピークアウトし、切れ切れながら時間のゆとりができてくるのに伴って、私の体調も回復軌道に乗った。そこで、懸案の先決事項、具体的には某誌から依頼を受けていた書評原稿の作成に着手。書評の対象は、京大准教授の手になるアカデミックな大作であり、しかも私にはあまりなじみのない産業史分野の研究だった。博士論文級の考察内容を正確に頭に入れるのは容易ではなく、大いに手間取ったが、正直、その手強さが楽しくもあった。

1月がかりでどうにか原稿を仕上げて編集者に送った数日後、病魔の影が遠のいた証と言ってよかろう、嬉しいことに私たち家族にそろって気ままに散歩できる時が戻ってきた。ナイス・タイミング！ おまけに紅葉の当たり年ときた。かくて、後顧の憂いなく、11月後半の日々を紅葉の中の散歩三昧で過ごしたところで、何かしら書きたいという欲求が私を深部から突き上げたのだった。

VI. 多感の果てに

(2010年12月筆)

【初心に返るべし】

時たま、当サイトの連絡口を通して、思いがけない人からメールが寄せられる。まったく面識のない方の所感やご意見が舞い込むこともあれば、古い友人に「近頃ほとんど内容を更新していないようだけど頑張れ」と発破をかけられたりもする。

今は2010年もあと数日を残すのみの年の瀬なので、もう7ヵ月も前になる。5月末に、私がまだ関西大学の教壇に立っていた時代に商学部生として受講したという女性からメールをもらった。あれから20数年、晩婚ながら今は幸せな家庭を築かれているとのこと。付記された旧姓に見覚えがあり、英書購読の時間に名簿を読み上げていた自分の姿も含めて、当時の教育現場を懐かしく思い出した。その後ほどなく京都大学の経済研究所に職場を変え、そこで17年間を過ごし、さらに3年半以上にわたって研究・教育活動とは関わりの薄い定年後の生活を送っていた私にとっては、忘却の霞に覆われていた遙かな過去の情景だった。

こうした不意打ち的なメールに接して心に波紋が生じるたびに、なんとも地味なこのウェブサイトであっても、社会の風を私の肌を感じさせる通気孔の役目をけなげに果たしてくれているのだな、との思いを新たにすると同時に、日頃ひどく閉鎖的な生活を送っている身であるだけに、外界と交流するパイプの通りを良くするためにも、私の側からの情報発信にもっと力を入れなければ、と反省しもあるのだが…。

実際には、私は度々、当サイトの更新を怠ってきた。とくにこの1年は、ごぶさた続きだった。より優先させたい仕事があったり、非常事態が長引いたりしたので、それなりに言い訳が立つけれど、自分に甘かった一面も否定できない。しかし、今はその甘えをすっきり払拭して、サイトの効用をもっともっと高めるように努めなければ、と思っている。なにしろ、いま現在の家庭事情からして、私には能動的に社会に飛び込んで研究・教育の面で（いや趣味、運動、社会奉仕の部面であっても）人とのかかわりを広げていく道は開かれていないも同然だし、その点では近い将来についてもあまり期待を持てそうにないのだから。

考えてみれば、3年半前に私がこのサイトを立ち上げたのは、閉塞した生活環境にあって社会と少しでも交流できるようにするための手段を自前で用意したい、との切実な動機に根ざしていた。当時との生活実態面でのほど近さを直視して、粛々と初心に立ち返ることにしよう。

【変化の自覚】

半分しゃれのつもりで「六十多惑」と名付けて書き始めたこの手記だが、読み返してみて、この上なくぴったりのタイトルだと感じた。むろん、先見の明を誇ろうってわけじゃない。私の定年後の4年近くがいかに迷いに満ちた歳月であったのかを再認識すれば、六十代にもなって不惑どころか多惑であり続けた我が身の頼りなさに、深い溜息が出る、というものだ。

まして、多惑の果てに達した境地が原点回帰ときては。しょせん狭い範囲を堂々巡りしていただけた話なのかもしれない。だけど、私としては、とんだ独り相撲だと自嘲する気持ちにもなれない。大きくみて原点回帰に違いないとはいえ、自分の中で変化した部分も確かにある。その多少の変化が進歩と言えるものであってくれば有り難いし、ここは手前勝手にそうと信じさせてもらうことにする。

では、何がいちばん変わったのか？ そうですねえ、研究に対するスタンスがそれでしょうか。少しお耳を拝借しますと――

事実経過は順を追って述べたとおりで、2007年3月末に定年を迎えた私は、諸般の事情にかんがみて、学術の世界から完全に身を引くことにした。その4ヵ月後に当サイトを立ち上げた際も、再び研究に関わるつもりなど全然なかった。ところが、サイトのコンテン

ツ用に折々の雑感を綴っている中で、思考する気力が刺激されたのか、現代経済の理解につながる勉強をしたいという欲求が頭をもたげてきた。そこで、コンテンツ作りとは別の「趣味の学習」と位置づけて、以前から興味を覚えていたサブプライム問題に関する知識の取り入れに着手。すると、あれこれ教えてもらう目的で参加した研究会での議論に触発されるところもあって、ほどなく受身の学習では物足りなくなる。そして、自ら知の創造に携わる研究の領分に、おずおずと再び足を踏み入れることに。定年後わずか半年余にして「宗旨替え」だった。

以後の研究の歩みは、お世辞にも順調とは言えない。退職翌年の春にサブプライム関係の初歩的な成果をサイトに連載し始めたが、すぐに中断。さらに幾度かゴー・アンド・ストップを繰り返し、現下の局面は半年も続いた最長の停止期をやっと脱したところだ。ただ、その都度やむをえない理由があつての中断だったので、私としては遺憾ではあっても、深い挫折感を抱くことはなかった。

今にして思えば、退職時の私のかたくなな研究拒絶は、アカデミックな研究に対するこだわりと裏腹の関係にあつたのだろう。家庭の事情や私自身の体調不良もあって、在職中においてすら学術論文を思うさま書けるのには程遠い状況だった。いわんや、秘書や図書館司書のサポート体制もなく、研究費にも事欠く自宅ではとてもやれっこない、と端から諦めていた。

しかし、「趣味の学習」を経て研究の場に回帰したときには、ただ知りたいという思いが高じてのことだっただけに、専門性の高い学術論文の執筆に固執する心情は薄れていた。誰も気づいていないテーマの発掘、独自のアプローチ、ひどく厳密な検証などに神経を使う類の専門論文は、ひとまず脇に置いておこう。自分としては、身近で重要な経済問題を取り上げ、庶民目線に立って真正面から斬り込み、むしろ一般教養的な叙述をおこなう方向を目指したい。また、再び研究・教育職に就くかどうかも第二義的な問題であつて自然の流れにまかせておけばよい、自分の「身の丈」に合った研究に生き甲斐を感じているという事実こそが肝心なのだ。こうした気持ちに変わっていた。

その後の紆余曲折を経ても、私の基本的なスタンスはそのままだ。いや、内輪の事情から研究中断を重ねる中で、さらに柔軟化した観もある。たまたま私の粗略な論考をみて研究心や学習意欲を刺激される人がいてくれるとしたら、ほんのわずかでも研究・教育に側面から貢献したことになるだろう。だとしたら、必ずしも論文の形にして知見を発表しなくても、たとえばエッセイの体裁でとりあえずの意見表明をしても、同様の貢献をないう

るのではないか。易きに付く自己満足的に考え方にすぎない、これでは研究の名に値しない一蹴されても仕方がないが、研究者としての意識の火を絶やさないための苦肉の便法だろうとご賢察いただければ有り難い。予防線を張るわけではないけれど、私を取り巻く環境条件からして、今からが従来に倍して便法に頼らざるをえない時間帯になるのは、ほとんど間違いのないところだろう。

なお、学術論文への執着が消えたのには、私個人の家庭事情に加えて、もう一つ別な要因も働いていた。かつて大学院坂井ゼミに所属していた若い研究者たちが、私の定年後も時々拙宅を訪ねてきてくれる。他大学の教員になっている人も、まだ京大大学院に籍をおいている人も、それぞれ学術的な価値のある著書や論文を次々に公刊していて、会うたびに逞しい成長に驚かされる。博士号の取得が相次ぐ彼らのエネルギーは頼もしいかぎりだが、そう感じることはアカデミックな仕事は彼らに任せておけばよいという思いに通じていた。

このところの私は、六十多惑の果てに心おだやかな境地に達したような気がしている。けれども、六十代の残す数年もそれが続くかとなると、不惑はそんなに強靱でもなさそうな予感もする。次第によっては、明日にでもまた多惑に逆戻りするかもしれない。今は本当に六十多惑の果てなのだろうか、それとも六十多惑の踊り場なのか。後者なら、いずれ恐縮しながら続編をしたためることになるだろう。